

## 日本語検定を活用し、コミュニケーション能力をアップ

埼玉県立三郷高等学校

～学習の基礎は「日本語」～

埼玉県東部に位置し、人口13万6千人を抱える三郷市。市内にある全日制男女共学の県立三郷高校（栗山広直校長）は、「志と思いやりを育む学校」を目標に、全校で基礎学力を上げるために、「日本語検定」を活用しています。2009年度から全校での団体受験を始め、2014年6月の日本語検定には609人が挑戦しました。生徒たちに「日本語の美しさを伝えたい」という栗山校長に、日本語検定を活用した成果などをお聞きました。

## ◆校長に就任した際の目標をお聞かせください

日本語の良さ、美しさを理解していない生徒が多いように感じました。話し掛けても帰ってくるのは単語だけで、会話になっていませんでした。自分の思いをうまく伝えられない、コミュニケーション力不足だったと思います。あらゆる学習の基礎となる日本語を正しく理解する力をつけてあげなくてはならないと感じました。私にとって校長は初めてだったので、教師、生徒、保護者が一体となり、一緒に行動して行く、「チーム三郷」をスローガンとして掲げました。



## ◆日本語検定を活用したのはなぜですか

全校での日本語検定は前任の校長が始め、徐々に成果が出ていました。そこで、2014年度は日本語検定の問題を一部採用している「高校日本語入門」（東京書籍）を初めて国語の授業のテキストとして使い、日本語の基礎をもう一度学習させました。難しいテキストだとつまづいてしまう生徒が多いのですが、入門編を繰り返し学習させることで、飽きずに勉強する姿勢が身に付きました。

学習内容を日本語検定の出題範囲に設定することで、授業の狙いが明確になり、生徒は学習しやすくなりました。授業中に手を上げる生徒が増え、活気が出てきたと聞いています。検定に合格するためだけに勉強するのではなく、基礎学力（日本語の力）を付けることを重視したことが、結果的に検定結果のレベルアップにつながったのだと思います。

## ◆どんな成果が得られましたか

日本語検定5級の合格率はそれまで60%程度でしたが、2014年度は74%に上がりました。また、大学（4年生・短大）への進学率も前年から8ポイント伸びました。（全国平均は横ばい）日本語検定は学校の年中行事として定着し、検定結果を心待ちにする生徒もいます。正しい日本語を身に付けて、大人とのコミュニケーションが取れるようになったことで、生徒が地域での活動やボランティア活動にも積極的に参加するようになりました。

生徒には事あるごとに、あいさつの大切さを話しています。礼儀作法の型（あいさつ）を身に付けていれば、最低限のことができます。敬語は社会人になってから生きてきます。あいさつや敬語の指導を続けてきたことで、学校内のトラブルも減ってきたように思います。

## ◆今後の取り組みは

教育は、教科の学習だけでは成果が得られるものではありません。あいさつやボランティアなど様々な活動が複合してはじめて結果が出るものだと思います。教員が生徒にきめ細かく声を掛け、生徒に教員の話聞く姿勢ができれば、授業にも集中できるようになります。今後も日本語検定の学習を単なる検定取得のためでなく、生徒のコミュニケーション能力を高めるための材料として活用していきたいと考えています。

（文責：時事通信社 光石 連太郎）

